7. 読者のひろば

(1) 第8後期本会会長就任に当って

古浜庄一

水素エネルギー協会は第1回石油ショック直後，社会的ニーズとそれに対する研究発表および討論の場として設立されたように思う。その間，初代会長神田英蔵先生，第2，4，5期会長赤松秀雄先生，第3期会長伏見康治先生および各期の会長を助け強力に本会の諸事業を推進された前会長（6，7，8前期）太田時男先生と，し界の権威と言うより名人と呼ぶべき大先生の指導のもとに数々の国内，国際会議を開催するなど，本会の目的達成の事業が行われ，会員諸兄にも満足していただいたものと推測します。

さて今回これら大先生の後の会長を私が引き継ぐことになりました。私は本会へは途中からお世話になり，会に対する貢献度も低く第一その器ではありません。平民会長の出現と思って気安く注文をつけ，よろしくごべんたつの程お願い致します。

私が水素でエンジンを初めて運転してから16年半がたち，その間多数の学部，修士および博士コースの学生がその研究・開発に寝食を断って立ち向って来ましたが，まだまだ完成には多くの難問が残されております。実は私の専門は内燃機関の耐久性，潤滑に関するもので，30年以上も前大学を出た直後の論文が今ようやく認められたと思われるものもあり，特に大学のような基礎研究は世間から忘れられているときも，一すじに堀り下げることが研究を成功に導くものと，つくづく感じています。特に私のような凡人には。

水素は石油の需要が予想以上に下落しコストダウンしたこと，水素製造法や運搬法などの基本的難問の解決および進展が遅れていること，米国などでは水素関係の研究費支出を大幅に縮小していることなどから，ここ数年間その研究は世間から忘れられたかのようなさみしさに陥いっている。しかしここを堪えて乏しい予算で新しい方向への展開を切り開く努力を続行することができれば，道は自ずから開かれるものと信じます。最近注目された液体水素ロケット，燃料電池発電によって昭和61年11月の本会の研究発表会は活況であった。いずれ液体水素超音速機なども話題となり，無公害的で無限の可能量を有する水素エネルギー時代も遠からず来るでしょう。

このように耐えながら出番を待つ時にこそ志を同じくする本会会員の研究，啓蒙，討論，親睦が必要であり，そのためには今最も差し迫っていることは会員の増員であると思う。現状は正会員111名，団体会員29社であり収入のほとんどを会費に頼っているので年間の総収入は約210万円で，事務局費は年間60万円，月5万円が許容限度であるので協会は事務の仕事もボランティアに頼っている。研究発表会も最低年1回は開催したいが経費の点で果せなかった。

そこで私の仕事の第一目標を会員倍増におきたい，周辺事情から倍増は云うべくして容易でない。本会の活動内容を単に水素のみでなく間接的に水素と関係あるもの，さらに水素と関係ない新エネルギーも水素との比較物として受け入れるなどの寛容さも必要となるかも知れない。また会を支えている維持会員へのサービスのために別の企画も必要かも知れない，本会の最大の泣きどころは水素と関係ある産業が極めて少く，全体の取引額も小さいことである。さらに最近の不況下であるので特別な配慮を要するであろう。

私は会員倍増を提案したが，この種の仕事は最も不得手であり，達成の自信はありません。しかしそれ無しには本会の存続もむつかしいからです。会員の全員に是非ご理解と積極的なご協力をお願いする次第であります。

(2) 第6回世界水素エネルギー会議のことなど

HESS会長　太　田　時　男

世界水素エネルギー会議はWHECの略称で知られている。第1回のMiami,第2回のZürich,第3回の東京，第4回のPasadena,第5回のTrontoに引続き，1986年7月20日～24日にAUSTRIA のVienna (Wien) で第6回が開催された。

筆者は主催学会の IAHE（国際水素エネルギー協会）の理事（創立メンバー）として当初から，WHEC の運営に当ってきた。本誌に第6回 WHEC の概略を記録しておきたいと思う。

会議場は宮殿 Hofbury, Conference, Chairman は Nikola Getoff (Vienna 大学) が務めた。参加者数は登録者のみで 360 名（第1回～第5回のうち最少。ちなみに東京会議では，550名弱であった）。これはドル安のため，アメリカからの参加者数が少なく，相当数の参加申し込みが取消されたためである。

一方，参加国は 42ケ国に及び，これは過去のWHECで最多を記録した。主な国からの参加者数は次のようである。

西独（75），オーストリー（44），アメリカ（36），フランス（22），カナダ（19），イタリー（16），日本（15），中国（15），スイス（12），インド（12），英国（11），スゥエーデン（11），ベルギー（9），ブラジル（7），ソ連（6），ブルガリア（5），コンゴ（5），エジプト（4），デンマーク（4），ノルウェー（3），オランダ（3），UAE（3），など（2名以下省略）。

水素エネルギー研究・開発が，ますます盛大な機運にあるのは，カナダ，フランス，ドイツ，中国ソ連，などと見受けられた。特に中国の高い意欲には一驚した。

会議の印象としては Bockris や Geloff 一派の発表のように光化学の専門的な高度なものか